

資料9

点で計画されたことになる。この時期、春日山城下での軍役同様の普請とは、天正10年4月25日に山岸光祐・山岸秀能が申し出た「大手口寄居、御急御肝要候」と先述した天正10、年あるいは天正11年2月1日の直江与六宛上条宜順書状（県史348）の「一、山之下御普請、早々於御働者」が該当してくる。前者は謙信時代の大手口ではなく、愛宕谷の御屋敷新設にともなう府中口の内堀北端の荒川館（東城砦）か長池山砦、あるいは正養寺山砦とされるし、後者は先述のごとく御屋敷郭群と同前庭郭群の普請と「景勝一代略記」のみに記載される「（景虎方が）御城堤際迄取詰處、（景勝方の）城中隨一の人々、堤表へ打出」とする「堤」で、検地帳で「蓮池」とする御館川旧河道の堀化が推考される。

天正11年は越中の佐々成政が2月に魚津城・小出城の攻略と西頬城の落水に乱入し（県史335）、7月初旬頃西浜に侵攻し、時に佐々成政の越後侵攻の風聞が領内に伝えられて危機感を煽り、北には新発田重家の反乱が続き、信濃では川中島四郡を押さきながらも、徳川勢力の浸透に北信濃の対応が迫られる等上杉氏にとり難渋の年であった。

このような状況下のなかでの、「仰御普請之儀、尤無御余儀奉存候、本御軍役之様ニ可存候」である。しかもこの普請は「春日町などをも、如前々屏被成御付候者」と密接な関係をもつものであることは先述した。遺構からみられるこの時期の普請としては、内堀・外堀の開鑿普請、荒川館（東城砦）前庭郭の改築、長池山砦・正養寺山砦の新設あるいは修築、御屋敷郭群と同前庭郭群の普請、「蓮池」と呼ばれる御館川旧河道の堰堤による堀化等が推考される。このなかでも「本御軍役之様ニ可存」とする普請は、おそらく内堀と外堀の開鑿、御屋敷郭群と同前庭郭群の二つの普請に限定されるのではないだろうか。本史料に係る普請は、確定はできないが、「春日町などをも、如前々屏（屏カ）被成御付」は「仰御普請之儀」の主文に付随する従属節との理由から、内堀・外堀の開鑿普請としておきたい。

13. 春日山城の城域拡大とその変遷過程

これまで史料や遺構の個々について述べてきたが、これらを前号（中）の年表に合わせて大別的な9期にまとめ、それら各期の春日山城の変遷を観てゆくこととした。

第1期（観応2年頃～永正7年）（第9図）

南北朝の築城から永正の乱までの期間である。築城の年代は史料に欠き定かにはできないが、長尾系図に「他日仰上杉憲方二男竜命丸於越後為主、使居頬郡府内城、称民部太輔房方、為高景執事職、住鉢力峯、後号春日山」（越佐2-670）とみえる。春日神社の社伝では貞治年中に上杉憲宗の築城を伝え、頬郡誌稿は長禄年中の築城とあり、種々の築城説が伝えられている。竜命丸の守護在任の初見は、康暦2年4月（県史823）であるから、14世紀四半期頃に春日山要害は築城されたとも考えられる。

この時期の要害遺構は確認できず、推測の域をでない。永正の乱時の落城の様子からみれば、現在の実城範囲の普請をおこない要害化したものであろうか。長尾系図にみえる守護代長尾高景の在城は、可能性としては理解できるものの、断定は出来ない。当時の要害大手道は、後の御中屋敷の成立や千貫門進入路の付け替え、北陸道の山道である桑取街道の存在からして、実

城北側の蓮池口であったことは確実とみられる。

桑取街道沿いには春日神社と林泉寺があり、この他国府鎮護の金剛院の存在が伝えられている。春日神社のその社伝で、永徳年中に長尾高景が春日山城内の山頂にあった社殿を、城外の現在地に遷宮したものと伝える。また林泉寺は、明応6年守護代長尾能景が父重景の法要のために建立した曹洞禪林で、明応6年7月21日に開堂式を挙行した。山号は春日山、寺号は重景の法号から林泉寺とした。

第2期（永正7年～享禄2年）（第10図）

永正の乱で上杉頤定の国府躊躇から、戦後の長尾為景は府中居館と春日要害の強化を促したに相違ないと考えられる。永正10年為景からの主護権回復を狙う上杉定実の春日山要害の籠城、さらに享禄の乱（上条の乱）における定実の為景への反抗、為景による定実の出家と春日屋敷への幽閉がおこなわれたが、それらは為景の居館と要害の強化普請を仮定して思考すべき時期である。

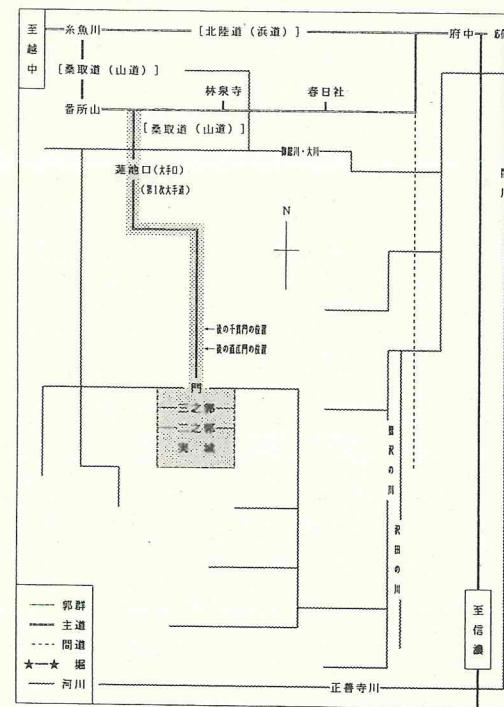
春日山要害における蓮池口道から白山口道への千貫門進入路の切り替え普請は、為景の大手千貫門の普請を示唆するものである。この仮定が許されるならば、千貫門の内郭にあたる直江郭群の増設、すなわちこの時点での新三之郭の形成を考えられよう。永正10年の定実の春日山籠城はその結果であろう。

先に史料1で触れたが、為景の府中居館が「某館」、「堀内」、「城内」等と為景自身の書状にあり、これにより永正10年時点での府中長尾館は、堀と土塁が回繞していたことが判断できる。府中において地名が示す館址で、地表遺構から濠塁は認められる館址は、「御館」と「館の越」の二ヶ所で、弘治年中の造営とされる「御館」を除くと「館の越」館が唯一ものとなり、「館の越」館は守護代長尾館の可能性が生じる。いずれにしても、守護代長尾館の濠塁の回繞は、永正の乱後に普請されたものと推測される。

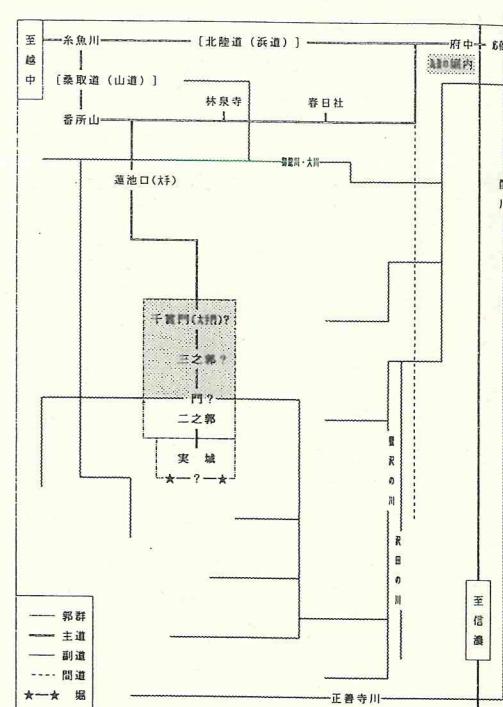
第3期（享禄3年～天文19年）（第11図）

この時期は、享禄の乱後に守護代為景が守護定実の出家と春日屋敷への封じ込めを完了して実権を掌握した。その後の天文の乱をへて、晴景と家督相続と為景入没、晴景と景虎の対立抗争へて景虎の家督相続、守護定実の入没と景虎の山上杉越後守護職の家督をうける約20年間である。

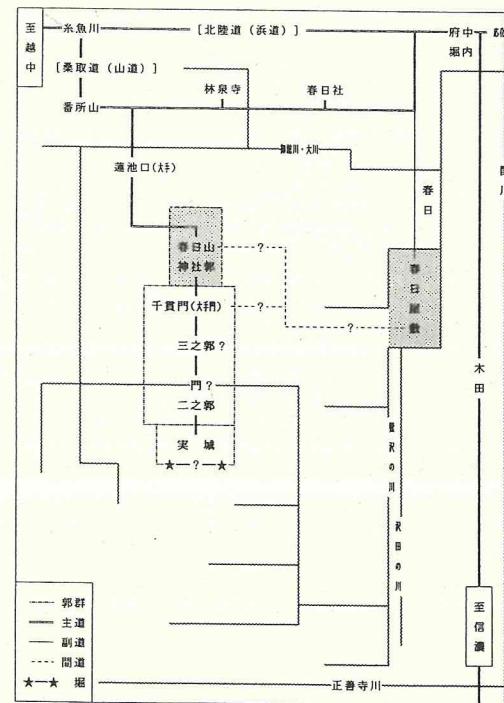
享禄4年7月14日と推考される「長尾信濃守有子細、春日山へ帰城」をうけて、為景による春日山神社郭に比定される「御他屋」が成立し、守護代長尾家にとり春日山要害は名実ともに家督相続そのものとなった。天文17年12月30日晴景から景虎の家督相続に際し、「従屋形様御諱を以、御無事相調、鉢峰へ御移候、寔目出被思召候」（越佐4-2）等はそのことを如実に物語るものである。しかしこの時期には、この後に居館としての府中御館の造営があり、山下居館の御中屋敷が成立することから、春日山城は要害としての機能のみでることに留意しておきたい。次に守護定実の出家とあわせて、後の春日山城に大きな影響を与える「春日屋敷」が造営されたことがあげられる。



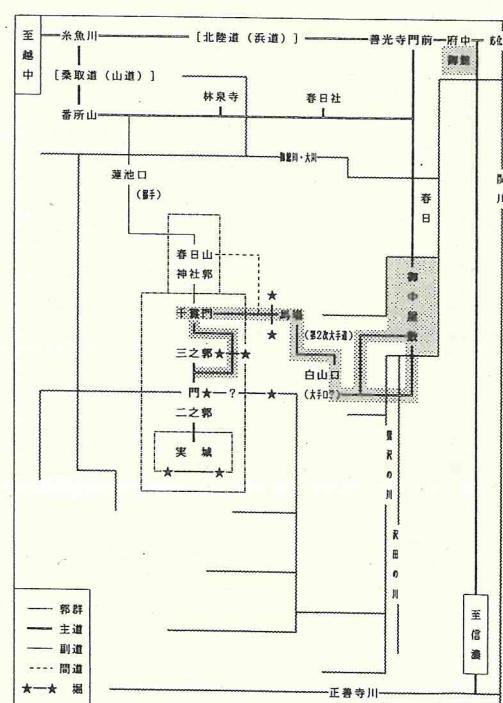
第9図 第1期



第10図 第2期



第11図 第3期



第12図 第4期

第4期 (天文19年～永禄3年) (第12図)

天文19年2月26日守護定実が没し、2日後の28日には將軍足利義輝から景虎に白傘袋と毛氈鞍履の使用が許され（県史939～943）、景虎が名実ともに守護定実の継承者であることが確立した。景虎は春日屋敷を相続し、春日屋敷は山下の根小屋「中屋敷」に転じ、中屋敷から千貫門に至る新大手道の白山口道が新設され、大手道の切り替えが行われた。これに伴う千貫門進入路の切り替え、千貫門から直江郭の東側斜面を通り直江門に至る城道の整備、馬場郭西堀の開鑿、千貫門の兵溜り脇にある城道を切る連続する二本の薬研堀の開鑿等は、おそらく白山口道新設時に大手を固めるために普請されたものと考えられる。この期の要害中核部の普請は定かではないが、実城井戸郭と現二之郭橋台間の薬研堀（実城と二之郭群を区分する堀）は、この時期に実城搦手を固めるの普請によるのかも知れない。

この期、府中に於いて御館が普請されている。御館の成立時期については、上杉年譜では関東管領上杉憲政の来越にあわせた天文21年とするが、これは御館の乱時に憲政隠居館化したことによる江戸期の加飾と思考される。他には弘治年中説（井上銳夫1966）、永禄4年説（池田嘉一1971）などの説がある。また小島幸雄氏は発掘調査資料によると、遺物に青磁が極めて少なく、16世紀中頃以前の構築は考えられないとする。いずれにせよ、確証はないが、御館の造営は天文19年（1550）頃以降の本時期に普請されたものとして誤りはなかろう。景虎の御館造営普請は、この時期春日山城が原則的に要害機能から脱し得なかったと言いか切れる。

第5期 (永禄3年～永禄6年) (第13図)

この時期は景虎から政虎、政虎から輝虎と改名し、すでに前時期の天文22年川中島に戦い（第1次）、弘治元年北条高広・同2年大熊朝秀が武田晴信に通じ、永禄2年上洛し、永禄3年・同4年に関東出陣等領國への動きが始まる。景虎の領域が独立性の強い国衆をまとめあげ、守護領國の領域内から本格的な領國域外に進出し、領國争奪戦を展開しながら戦国大名としての領國を拡大してゆく時期にあたる。なお、永禄4年に景虎は上杉姓と関東管領職を継嗣する。

永禄3年8月25日景虎は「在陣留守名か捷事」を出して、留守将5人に対し春日山要害の普請を命じ、また城山の竹木の伐採を禁じている（県史3274）。このときの普請内容は明らかではないが、永禄5年の春日町の存在と拡大の方向（県史3938、越佐4-380）、永禄7年3月中屋敷の蔵物の実城揚げ（越佐4-468）、同年8月の大門と大手門の作事と普請（県史2116）をみると、少なくとも永禄3年の普請は、春日山城の居城化への基本方針が設定されたの上での普請ではないかと思われる。したがって、実城北側の配郭構成から、一転して実城南側尾根に（実城十二之郭十三之郭）をもって構成する要害から居城への脱皮のための大普請が継続的におこなわれ、白山口大手道に代えて、蟹沢口の大手から実城の南の三之郭に通じる現大手道（蟹沢口大手道）の新大手道普請がおこなわれた時期である。

第6期 (永禄7年～天正6年) (第14図)

春日山城の居城化が完成し、山頂郭城がさらに拡大される時期である。永禄7年8月には「大門・大手門」の作事と普請が指示され、（実城1十二之郭1十三之郭1）の3郭構造が、（実

城十二之郭十三之郭1十三之郭2十三之郭3)の三之郭の3郭構造が完成し、結果として景勝以下の府中守備勢を迎えたと判断される。実城の北部の旧城域に対し、実城の南部域には謙信の普請による5郭構成よりなる新城域が完成した。先述したが、当初の「三之郭」は「三之郭1」となり、「中城」となり、景勝の居住により景勝は「御中城様」と尊称されることになった。そして中城郭虎口は大手門といわれ、三之郭2の安田郭の虎口城門は大門と呼ばれた。

また元亀元年4月25日北条氏秀を養子景虎となし、新普請した二之郭の居館にいた。三郎景虎郭と同様に、実城東崖下を取り巻く仮称北屯郭・仮称南屯郭・上蔵郭・下蔵郭、実城西崖下の古志十郎郭等の二之郭帶と実城西側の尾根を切る空堀などは、おそらくこの時期の普請になるものと考えるが、もちろん推定の域を出ない。さらに山下の府中口の低丘陵には東城砦(荒川館)なる寄居が普請されていた可能性がある。

第7期(天正6～天正8年)(第15図)

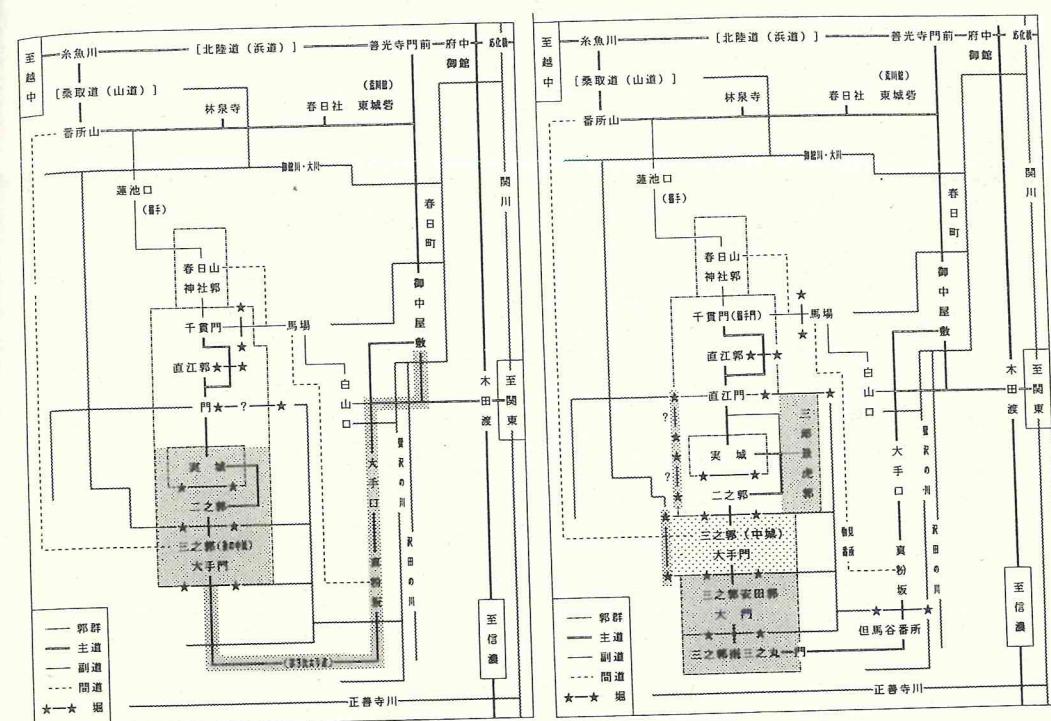
天正6年3月13日謙信が死去による謙信の後継者の座をめぐる景勝と三郎景虎との対立にはじまり、続いて家臣団が分裂して御館の乱が起こり、景勝勢の春日山籠城と府中攻撃、中郡の平定から景勝による領内統一までの約2年間の時期である。

この時期はその初期において景虎勢の春日町の焼き打ち、城下愛宕谷の戦い、春日中屋敷の戦い、春日山城への攻撃と景勝方の籠城と荒川館への出撃などで常時戦闘状態にあることから、大規模な普請は行われず、千貫門の修理や仮称直江門の改修など戦闘にともなう破壊部分の修復程度と思われるが、推測の域をでない。なお長池山砦はこの時期の普請とされる(室岡博他1974)。

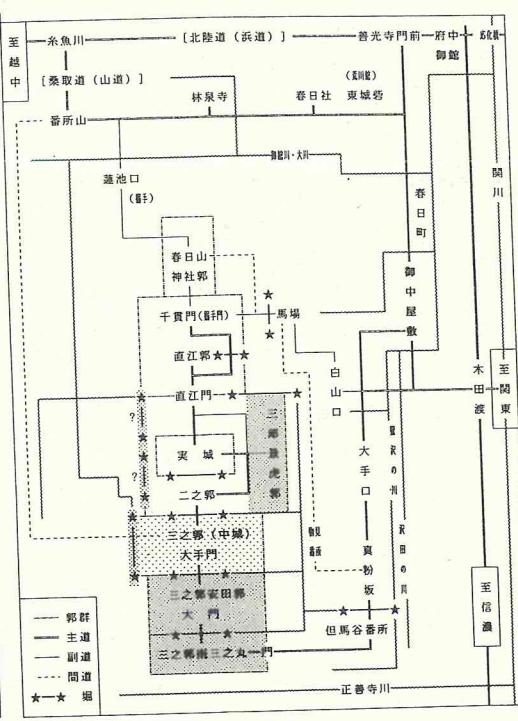
第8期(天正9年～慶長3年)(第16図)

御館の乱の終息から上杉氏の会津移封までの間で、この時期は独立した戦国大名としての上杉領国体制期と、天正12年6月景勝が秀吉に臣従の礼をとて以降の近世大名化した上杉領国体制期の2時期に区分するものであろうが、春日山城の遺構や史料から現時点では峻別できないので、この度は一時期として取り扱っておきたい。

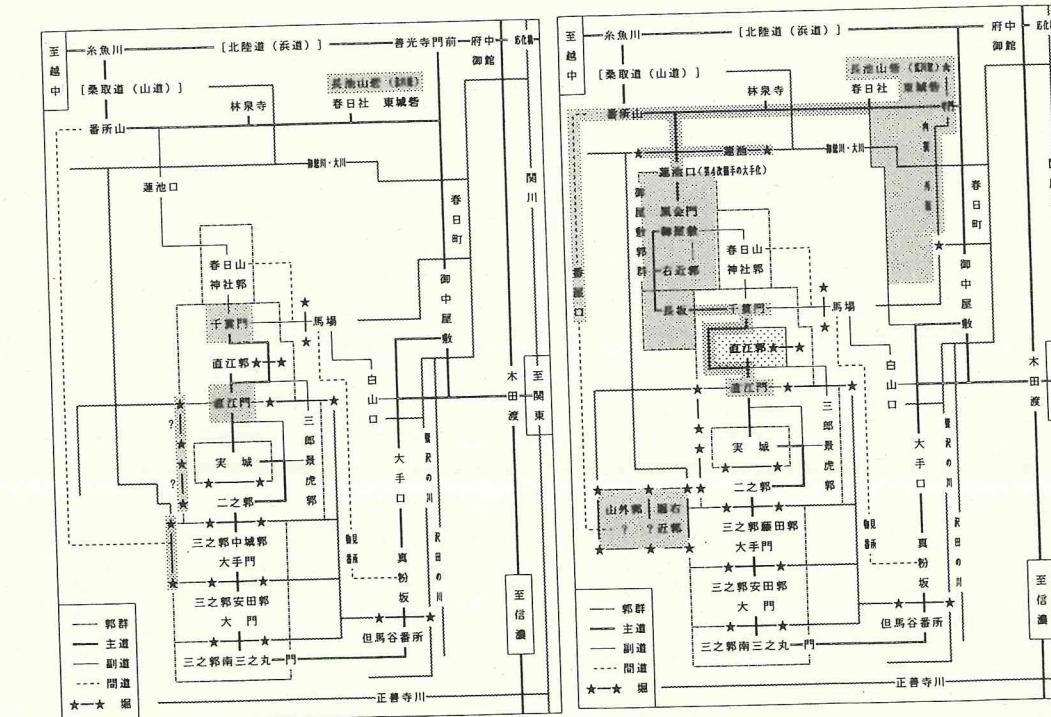
天正9年織田勢の越中侵略がはじまった。3月1日景勝は越中に出陣し(県史654)、5月には織田に通じた新発田の反乱が発覚した(県史728)。翌10年3月武田氏を滅ぼした織田勢は、6月3日越中魚津城を落城させ、信濃から国境を越えて関山・二本木・片貝迄侵入する事態となり(越佐6-217)、戦国大名上杉氏の滅亡は眼前に迫り、景勝は春日山城を枕に死を覚悟したが(県史3260)、本能寺の変によりことなきをえた。この状況下の天正10年2月1日「山之下御普請」が計画され、同年4月25日府中口の大手之寄居の普請が進言されるのである。この時点で謙信の造営による山下居館の中屋敷は、すでに灰燼に帰し存在しないことに留意する必要があろう。また、織田勢の春日山城攻撃に備えての防御施設の整備、府中や春日町の機能を籠城体制に取り込むための施設整備が万難を押して実行されたと考えられる。断定はできないが、普請の対象としては御屋敷郭群、御屋敷前庭郭群、長坂郭群、荒川館(東城砦)、長池山砦等があり、今後に詳細な検討を要すことになろう。



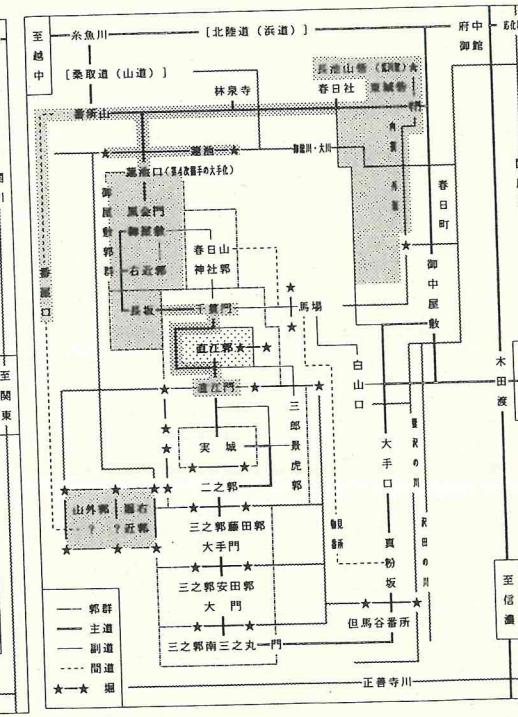
第13図 第5期



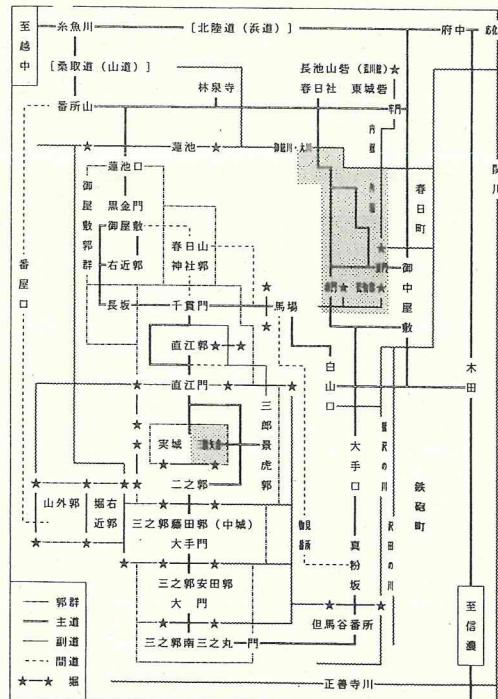
第14図 第6期



第15図 第7期



第16図 第8期



第17図 第9期

御留守衆として黒金上野介景信2350石と宮島与八郎358石を任じ、同心衆等を置いたことが知られ、景勝は春日山在城の黒金景信に常々普請を命じていたらしい（県史3860・3484）。

景勝は豊臣政権に軍役の他、文禄3年伏見惣堀普請の手伝い（県史310）、慶長2年1月伏見船入普請の手伝いを命じられてはいたが（県史3642）、同時に春日山城の補強や管理にも心血を注ぎ、同年2月18日直江兼続は山田雅樂助に対して3月1日から「春日山御城御普請、黒上（黒金景信）・岩備（岩井信能）・其他少給人迄百石ニ付而五人役之分ニ申付」「所々御門橋以下破損之所、急度可申付事」と指令している（上杉年譜）。虎口の城門や虎口前面の空堀に懸かる橋の修理修復は兎に角、この時の普請がどの郭群を指すのかは定かではない。黒金景信の慶長2年12月1日の春日山諸役所御番被仰付人数は146人で（上杉年譜）、岩井信能は目録では、飯山留守役2984石である。「百石ニ付而五人役之分」であるから、黒金と岩井双方で167人とすれば、おそらく最大でも約300人程度を役付した普請であろう。確証は無く、推測の域をでないが、この普請は三之郭群中城郭に西隣し、城中で最も大規模な箱堀である一枚田堀の改削と中城郭西土塁の構築、山外郭群の造成整備等の可能性が考えられる。上杉氏はこの普請をもって会津に転封した。

第9期（慶長3年～慶長12年）（第17図） 越前福井から堀秀治が45万石をもって春日山城に入城してから福島城に移るまでの10年間である。慶長5年3月に福島城が計画立案され、越後一揆を鎮圧した同年10月以降に普請が開始されている（中沢肇1982）ので、堀氏の春日山城への普請施工は慶長3年・4年の2ヶ年間と考えられる。

天正11年2月景勝と秀吉との提携がなったが、このことは逆に柴田勝家方の佐々成政の越後西浜への侵入、新発田重家との対立激化、徳川勢力の川中島四郡への侵食を招くこととなり、越中・新発田・信濃への出陣や出兵が続く。天正14年の年頭には新発田問題を除き片付き、6月豊臣秀吉に属することとなった。この時期、直江兼続が上条宜順へ相談をかけた軍役同様の「御普請之儀」と、付隨して宜順が兼続に提言した「春日町などをも、如前々堀被成御付候」がでてくる。この普請とは、第1には内堀と外堀の開鑿と土塁の構築であり、第2には御屋敷郭群がその仮定の対象とされよう。

天正16年景勝は二度目の上洛をしたが、以来上杉は豊臣体制下の一大名と化し、慶長3年越後を後にした。目録には、春日山

〈碑〉

堀氏の春日山普請については、すでに小村式氏が指摘された「北越雑記」に「慶長四年己亥年三月三階矢倉御普請始、奉行堀太郎左衛門、沢田左兵衛、小泉左衛門」とある実城三階櫓で（小村1983）、実城の高所で空堀で南北に区画された南側区画、現在の天主台と呼ばれる場所に建築されたと考えられる。なお、本三階櫓は福島城の本丸三階櫓として移築され、さらに高田城の本丸三階櫓として再移築された可能性をもつ櫓である。この他に「監物堀」「監物土井」と呼ばれる「惣構え」の南部の東門虎口から南門虎口の間の堀と土塁の構築が考えられる。城下「惣構え」の完成により、「監物屋敷」「監物倉」の地名の所在を明らかにしたように、「惣構え」の内郭は、家臣団屋敷が形成されたと考えられる。堀氏の春日山城への普請は、この二箇所ではなかったかと思われる。

14. おわりに

私が春日山城にはじめて繋がりをもったのは、昭和48年の秋で、以来約20年の年月が過ぎている。この間、春日山城を専門に研究を進めてきたわけではなく、合間にみて踏査をし、資料を少しづつ集めてきた。最近春日山を歩くと自然と地元民の生産の活動による遺跡破壊が確実に進行してゆくさまを観て、心に痛みを覚えるようになってきた。春日山城は新潟県にとり、また日本にとっての第1級の文化財であり、これを守ることは、「謙信の春日山城」から脱して、史的評価を具体的な理論としてまとめてゆく必要があろう。この度は個々の遺構の証明を重ねて春日山城全体の時代別評価に繋げること考えて纏めることができたのであるが、これは第1段階と自覺している。いうまでもなく、今後さらに史料の検討が必要であり、発掘調査による新資料が提示され、本文の説明や解釈の修改があると思うが、積極的に対応したいと考えている。各位の御批判や御指導を賜れば幸いである。

筆を置くにあたり、下記の方々から御指導を賜り、資料や文献の提供と紹介を頂いた。厚く感謝御礼を申し上げる。

小島幸雄・青木豊昭・赤沢計眞・阿部洋輔・伊藤正義・植木宏・大越朝男・兼康保明・木村秀彦・坂井秀弥・佐藤圭・佐藤雅一・白水正・菅瀬亮司・高岡徹・竹田和夫・高橋勉・田辺早苗・寺崎裕助・中西聰・西野秀和・宮崎博・矢田俊文・横山勝栄・渡辺誠

春日山城引用参考文献

- 秋田裕毅（1990）織田信長と安土城 創元社
- 阿部恭平（1980）「今井城」「琵琶懸城」日本城郭体系7 新人物往来社
- 阿部洋輔編（1984）上杉氏の研究 戦国大名論集9 吉川弘文館
- IAN HOGG（1985）THE HISTORY OF FORTS AND CASTLES, CRESCENT BOOKS, New York.
- 池 享（1987）「上杉謙信」 戦国の世 新潟県史通史編2 中世 新潟県
- 池田嘉一（1967）「春日山城の沿革」高田市文化財調査報告書第8集 高田市教育委員会
- 池田嘉一（1971）史伝上杉謙信（全） 中村書房
- 池田嘉一（1986）「春日山城から高田城まで」 須城文化26 上越郷土研究会

- 石丸 慶 (1980) 「中世城郭史小論一根小屋について」 東京女子短期大学紀要第2輯
- 伊藤正一 (1967) 「春日山城について—遺構を中心にして」 高田市文化財調査報告書第8集 高田市教育委員会
- 伊藤正一 (1969) 「上関城の性格」 関川村上関城跡緊急発掘調査報告 関川村教育委員会
- 伊藤正一 (1987) 「春日山城」「平林城」「今井城」中世城郭辞典(二)新人物往来社
- 稻田泰策 (1964) 「五十嵐文庫 伊佐早本 文禄三年定納員數目録(二)」 須城文21 上越郷土研究会
- 植木 宏 (1969) 「春日山城周辺の支砦—海岸ぞえ(西方)を中心とした遺構」 須城文化28 上越郷土研究会
- 植木 宏 (1971) 「中世城郭の配置と効用—春日山城周辺と西須城地方を中心にして」 社会科研究紀要第6集 新潟県社会科教育研究会
- 植木 宏 (1975) 「越後春日山城の縄張一周辺砦群の配置と遺構に基づく推定」 越後地方の研究 渡辺慶一先生古希記念論集刊行委員会
- 植木 宏 (1987) 「春日山城の生いたちと構造」 上杉謙信のすべて 新人物往来社
- 越後須城郡誌稿刊行会 (1969) 訂正越後須城郡誌稿 豊島書房
- 太田静六 (1991) スペイン・ホルトガルの古城 吉川弘文館
- 奥田直栄・井上銳夫・関 雅之・金子拓男・山本 仁・花ヶ前盛明 (1966) 御館遺跡緊急調査経過報告書 新潟県教育委員会
- 小村 式 (1963) 「春日山城下町の成立」 藩制成立史の総合研究[米沢藩] 吉川弘文館
- 小村 式 (1983) 「築城と城下の建設(春日山の普請等)」 幕藩制成立史の基礎的研究 吉川弘文館
- 加藤晋平 (1974) 「琵琶懸城址の実測調査」 十日町市における文化財の調査 十日町市文化財調査報告5・立教大学博物館学研究室調査方向14 十日町市教育委員会・立教大学学校社会教育講座博物館学研究室
- 金子拓男 (1973) 五十嵐小文治館発掘調査報告書 下田村教育研究会
- 金子拓男 (1980) 「春日山城」 日本城郭体系第7巻 新人物往来社
- 金子拓男 (1981) 「越後春日山城」 日本歴史396 吉川弘文館
- 金子拓男 (1989) 「春日山城について」 新潟建立新潟江南高等学校研究収録第17号
- 金子拓男 (1990) 「春日山城の城域拡大とその時代性について(上)」 新潟考古第1号 新潟考古学会
- 金子拓男 (1991) 「春日山城の城域拡大とその時代性について(中)」 新潟考古第2号 新潟考古学会
- 神林村教育委員会 (1984) 史跡平林保存管理計画書
- 小島幸雄 (1978) 春日山城発掘調査概報I 上越市教育委員会
- 小島幸雄 (1979) 春日山城発掘調査概報II 上越市教育委員会

- 小島幸雄 (1980) 春日山城発掘調査概報III 上越市教育委員会
- 小島幸雄 (1981) 春日山城発掘調査概報IV 上越市教育委員会
- 小島幸雄 (1982) 春日山城発掘調査概報V 上越市教育委員会
- 小島幸雄 (1983) 春日山城発掘調査概報VI 上越市教育委員会
- 小島幸雄・中村恵美子 (1984) 春日山城発掘調査概報VII 上越市教育委員会
- 小島幸雄 (1985) 春日山城発掘調査概報VIII 上越市教育委員会
- 小島幸雄 (1986) 春日山城発掘調査概報IX 上越市教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗・竹田和夫 (1986) 新井市坪の内館跡 新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 (1991) 「絵図にみると城館と町」 中世の城と考古学 新人物往来社
- 柴田 実・日名子元雄 (1942) 安土城址 滋賀県史蹟調査報告第11冊 滋賀県(名著出版版)
- 豊田豊寿 (1971) 「春日山城形図考」 織田武雄先生退官記念論集 柳原書店
- 菅沼幸春 (1991) 「松倉城の概要と実測—金山を背負った越中最大級の根小屋式山城—」 越中の中世城郭創刊号 富山の城を考える会
- 泰山哲之 (1967) 「大阪城」 大阪府の城 日本城郭全集9 人物往来社
- 千田嘉博 (1987) 「織豊系城郭の構造」 史林第70巻第2号 史学研究会
- 高岡 徹 (1980) 「宮崎城」「松倉城」 日本城郭体系第7巻 新人物往来社
- 高橋 勉 (1991) 「坪の内館跡」 城館跡出土の土器・陶磁器 第4回北陸中世土器研究会
- 高橋成計 (1991) 「越中松倉城墨群における遺構の考察(中間報告)」 越中の中世城郭創刊号 富山の城を考える会
- 高橋義彦編 (1926) 越佐史料卷二 三秀舎
- 高橋義彦編 (1927) 越佐史料卷三 三秀舎
- 高橋義彦編 (1928) 越佐史料卷四 三秀舎
- 高橋義彦編 (1930) 越佐史料卷五 三秀舎
- 高橋義彦編 (1931) 越佐史料卷六 三秀舎
- 東京帝国大学 (1931) 『上杉文書之一』「家わけ第十二」 大日本古文書
- 東京帝国大学 (1935) 『上杉古文書之二』「家わけ第十二」 大日本古文書
- 東京大学史料編纂所 (1963) 『上杉古文書之三』「家わけ第十二」 大日本古文書
- 東京大学史料編纂所 (1985) 越後国郡絵図二「瀬波郡」
- 東京大学史料編纂所 (1987) 越後国郡絵図
- 富山県 (1980) 富山県史史料編II 中世
- 中井 均 (1990) 「織豊系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣の出現」 中世城郭研究論集め 新人物往来社
- 中沢 肇 (1967) 「城下町」「街道」春日山城 高田市文化財調査報告書第8集 高田市教育委員会

- 中沢 肇 (1969) 「府内の館址について」頸城文化27 上越郷土研究会
- 中沢 肇 (1982) 越後福島城史話 北越出版
- 新潟県 (1982) 新潟県史資料編3 中世一文書編1
- 新潟県 (1983) 新潟県史資料編4 中世二文書編2
- 新潟県 (1984) 新潟県史資料編5 中世三文書編3
- 新潟県 (1987A) 新潟県史通史編2 中世
- 新潟県 (1987B) 「文禄三年定納員數目録」「上田土籍」「古代土籍」新潟県史別編3 人物編
- 西野秀和 (1980) 「鳥越城」石川県 日本城郭体系7 新人物往来社
- 花ヶ前盛明 (1988) 「春日山城とその城下町」日本史の指導における地域資料の活用 研究双書10 新潟県教育センター
- 花ヶ前盛明 (1989) 「春日山城の城下町」角川地名通信第38号 角川文化振興財団
- 福井県立朝倉資料館 (1987) 「昭和61年度発掘調査整備事業概報」特別史跡—乘谷朝倉氏遺跡 XVIII
- 細谷菊治 (1980) 「荒砥城」新潟県 日本城郭体系7 新人物往来社
- 布施秀治 (1917) 上杉謙信伝 謙信文庫・高陽社
- 堀 直敬 (1971) 堀家の歴史(飯田・村松・須坂・椎谷) 新人物往来社
- 前川 要 (1991) 「戦国期城下町その二—春日山城—」日本史研究343 日本史研究会
- 前川要・千田嘉博・小島道裕 (1991) 「戦国期城下町研究ノート—郡山城・吉田・春日山、岡豊一」国立歴史民族資料館研究報告第32集 第一法規出版株式会社
- 丸山克己 (1987) 十日町の城跡 十日町市博物館
- 村田修三 (1990) 「岐阜城の縄張り」千疊敷—織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備岐阜市文化財報告1991-3 岐阜市教育委員会
- 室岡 博 (1969) 「上杉謙信の春日山とその天主台」信濃第21巻第1号 信濃史学会
- 室岡博・植木宏・花ヶ前盛明・増村孝雄 (1974) 春日山城下長池山砦発掘調査報告書 上越市教育委員会
- 矢田俊文 (1989) 「戦国大名の登場(上杉氏の登場)」古文書の語る日本史 築摩書房
- 山田正男 (1979) 春日山調査研究—鉢ヶ峰城—
- 渡辺慶一 (1951) 越後府中文化 直江津町社会教育奉仕会